

2022年奄美大島南部リーフチェック結果報告書

- ・ 実施日時：2022年12月7日（水）9:00～12:00
- ・ 主催：瀬戸内町海を守る会
- ・ 調査地：瀬戸内町安脚場沖
- ・ チームリーダー(TL)：祝 隆之（瀬戸内町海を守る会会長）
- ・ チーム科学者(TS)：興 克樹（奄美海洋生物研究会会長）
- ・ 参加者：11名（瀬戸内町海を守る会9名、瀬戸内町役場1名、奄美海洋生物研究会1名）

○調査概要

当調査ポイントでのリーフチェックは、22年連続22回目の実施である。2001年から2005年にかけて、奄美大島南周辺海域では、オニヒトデが大量発生しサンゴは壊滅的なダメージを受けたが、調査地点は、2002年6月にサンゴ保全海域に設定、継続して駆除が行われサンゴ群落が保全されて優れた海中景観が保たれており、ダイビングやシュノーケリング等の観光資源としても活用されている（投錨によるサンゴ破損を防止するため海を守る会では係留ブイを設置）。調査地点は、加計呂麻島安脚場沖の約200mに広がる礁斜面で、水深5mと水深10m地点にそれぞれ100mの測線を設定し、測線におけるサンゴの被度や魚類指標種の数、無脊椎生物の数など指定された項目について潜水調査を行った。

○調査結果

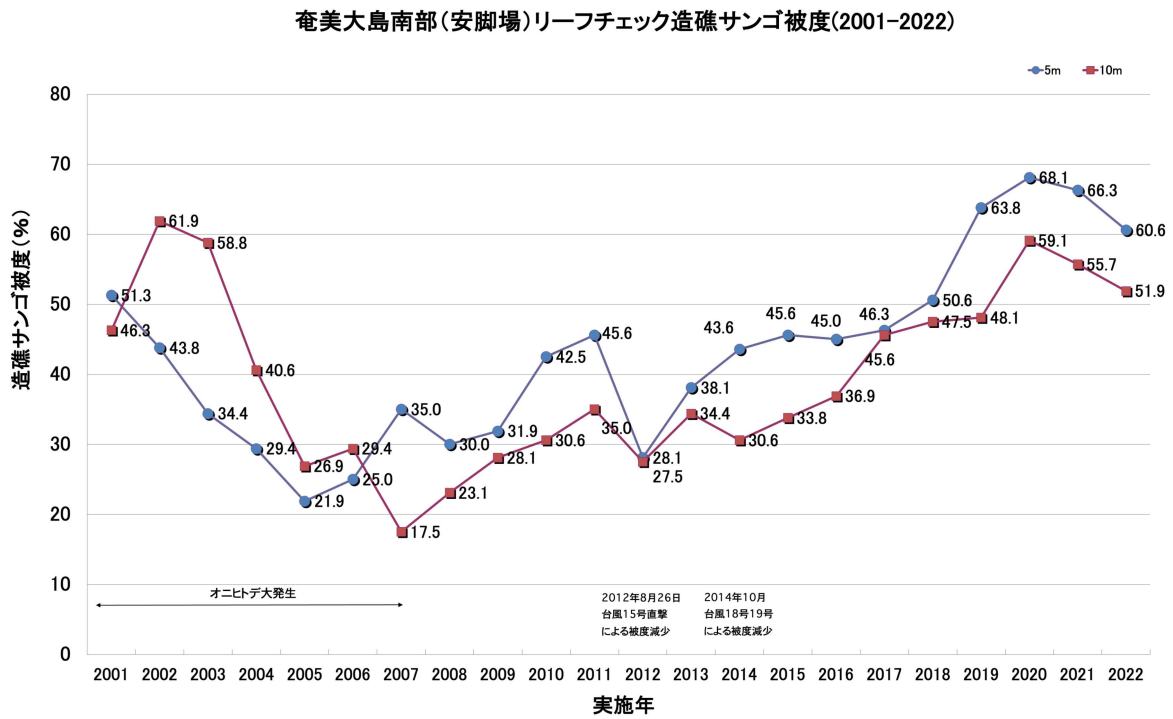
奄美大島中北部では2022年8月にサンゴの白化現象が発生したが、大島海峡では白化の発生も少なく影響は軽微であった。本調査において白化群体はほとんどみられなかった。生サンゴ被度（海底に占める生きたサンゴの割合）は、5m測線は60.6%、10m測線は51.9%と両測線で微減したが、測線の誤差の範囲で、サンゴ群集は良好な状態であった。

水深5m測線では、生サンゴ被度が2021年66.3%から2022年60.6%と微減した。白化群体やオニヒトデ食痕はみられなかった。新規加入のサンゴが少ない状態が続いているが、ドーンミドリイシやヒメマツミドリイシ等の樹枝状ミドリイシ大型群体が生存している。魚類出現数はチョウチョウオ類は2021年22個体、2022年46個体と倍増した。無脊椎生物ではシャコガイ類が2020年12個体みられたが、2022年は確認できなかった。オニヒトデはみられなかった。

水深10m測線では、測線前半は樹枝状ハマサンゴ類やコモンサンゴ類が優占し、側線後半は樹枝状ミドリイシ属が優占する。生サンゴ被度は2021年55.7%から2022年51.9%と微減した。魚類出現数はチョウチョウオ類が2021年11個体から2022年46個体と4倍強に増加した。無脊椎生物はシャコ貝類が2021年10個体から2022年11個体とほぼ同数であった。オニヒトデはみられなかった。

両測線とも新規加入のサンゴは少ない状態が続いているが、大型ミドリイシ群体が生存しており、幼生の供給源や観光資源としても重要である。22年間サンゴが壊滅する事無く保全されていることは、サンゴ礁保全の成功例といえる。また、近年のボートシュノーケリングツアーの増加に対応するため、海を守る会ではダイビング用の係留ブイに加え、昨年から同海域浅所にボートシュノーケリング用の係留ブイを設置し、サンゴ礁の適正利用を推進している。

(調査結果)



(調査写真)

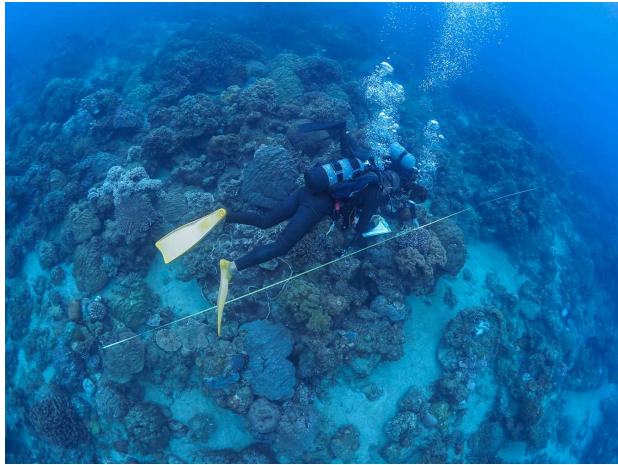


図 1. 水深 10m 測線 始点付近

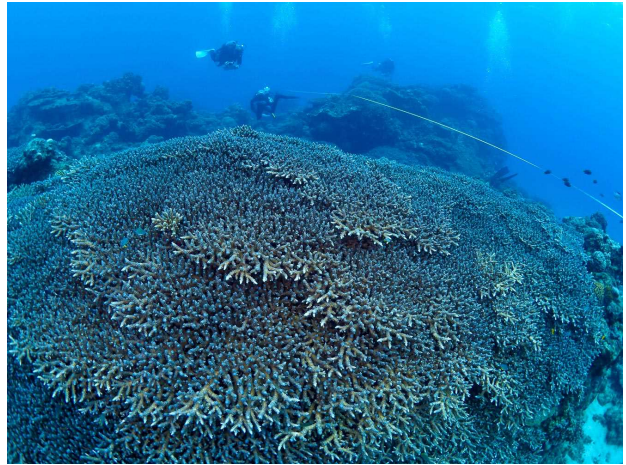


図 2. 水深 10m 測線



図 3. 水深 10m 測線 終点付近

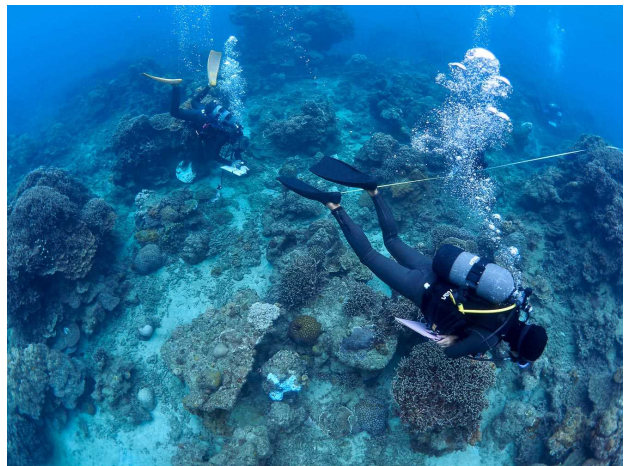


図 4. 水深 5m 測線 始点付近

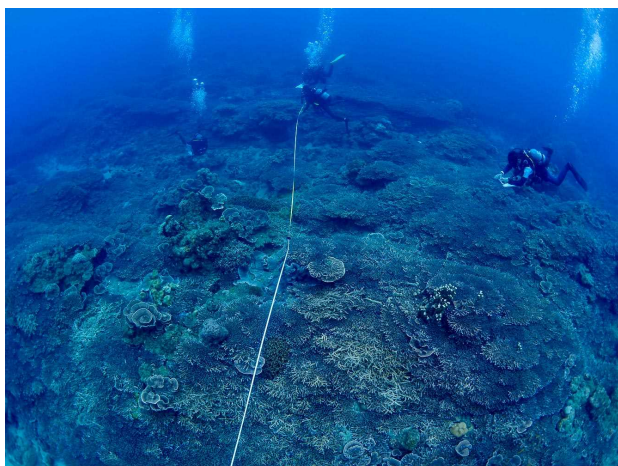


図 5. 水深 5m 測線

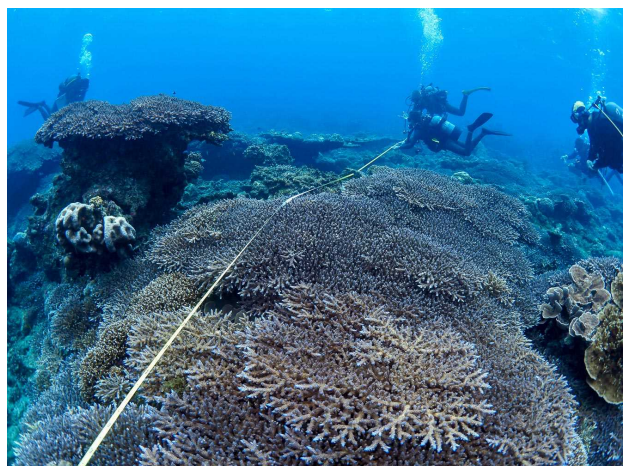


図 6. 水深 5m 測線 終点付近